

～多収穫栽培のポイントについて～

水田活用米穀として、多収性品種の栽培が広がっています。
多収穫栽培のポイントについてご紹介させていただきます。

1. 栽培のポイント

(1) 適正生育量の確保

ポイントは以下の5点です。

○適正な基肥量、穂肥量を施用しましょう。

○耕深15cmを確保しましょう。(根の健全な発達により籾数を確保)

○田植え時期を守りましょう。

田植えの目安は、「新潟次郎」は5月上旬、「あきだわら」は5月10日前後、
「いただき」は5月中旬です。

※遅植えの場合、早生品種は稲体が大きくなる前に出穂してしまい、
晩生品種は低温条件下で登熟するため登熟不良の恐れがあります。

○適正な栽植密度で田植えを行いましょう。

「新潟次郎」「あきだわら」は m^2 当たり18株(60株セット)以上、
「いただき」は m^2 当たり15～18株(50～60株セット)が目安です。

○穂肥は2回に分けて、目安の窒素分量(3kg/10a)を確実に施用しましょう。
特に籾数確保のため、1回目の穂肥は遅れずに施用することが重要です。



【1回目の穂肥時の生育めやす】(幼穂形成期頃)

| 品種 | 時期 (幼穂形成期) | 草丈 (cm) | 茎数 (本/ m^2) | 葉色 (SPAD) |
|-------|---------------|------------|--------------------|--------------|
| 新潟次郎 | 7月1～3日頃 | 60～64 | 520～550 (28～30) | 41～43 |
| いただき | 7月15～18日頃 | 70～75 | 400～440 (22～25) | 40～42 |
| あきだわら | 7月20日頃 | 80～85 | 410～430 (23～24) | 35～37 |

※ 掲載内容の無断使用・転載を禁じます。

(2) 防除の徹底

- 施肥窒素量が多い場合、いもち病が多発しやすくなるため、育苗箱施用による葉いもち防除・穂いもち予防防除を必ず行いましょう。
- 粃米のまま、もしくは粃殻を含めて家畜に給餌する場合は、出穂以降の農薬の散布を控えましょう。

2. 収穫・収量について

(1) 収穫適期

- 黄化粃割合が85～90%になった頃が収穫の適期です。
- 出穂後の積算温度の目安は、「新潟次郎」が1000℃、「いただき」が1000～1050℃、「あきだわら」が1050～1100℃です。

(2) 収量構成要素

- 収量構成要素は以下が目安です。

| 品種 | 目標収量 (kg/10a) | 穂数 (本/m ²) | 一穂粃数 (粒) | m ² 粃数 (千粒) | 登熟歩合 (%) | 千粒重 (g) |
|-----------------|------------------|---------------------------|-------------|---------------------------|-------------|------------|
| 新潟次郎 (極早生) | 700 | 410～450 | 90～96 | 39～41 | 80 | 21.5～22.5 |
| いただき (晩生) | 700 | 340～370 | 94～102 | 35～37 | 80～85 | 23.3～24.0 |
| あきだわら (晩生) | 800 | 370～390 | 112～116 | 43 | 85 | 22.0 |
| (参考) コシヒカリ一般 | 540 | 380 | 75 | 28 | 90 | 22.0 |

※ 栽培暦（暫定版）より

多収性品種の栽培は土壌養分を収奪しやすいため、堆肥や土づくり資材、もみ殻の施用などを適宜行いましょう。

ケイ酸、カリウムの還元のため、稲わらの秋すき込みも有効です。

また、新潟次郎は出穂が早いので、雀害対策を適宜実施しましょう。

栽培目安を守り、多収穫を目指しましょう！

(担い手・営農支援部 担い手・営農支援課)

※ 掲載内容の無断使用・転載を禁じます。